

常勤102人非常勤66人合計168人が未配置!

兵庫教組40市町教育委員会すべてから回答を得て記者発表

兵庫教組は、5月23日(月)から6月10日(金)にかけて、兵庫県下40市町教育委員会に「5月16日時点での教職員の未配置」について調査依頼を行い、全ての市町教育委員会から回答を得て、その結果を記者発表しました。その様子は、NHKの「リブラ兵庫」「兵庫ニュース845」や、サンテレビの「キャッチプラス」でそれぞれトップニュースとしてとり上げられ、この問題への関心の高さが浮き彫りになりました。放送後には、現場教職員から、「教育現場がかかえる重大な問題をよく指摘してくれた」「専科や兵庫型学習システムの担当者は、未配置になっている学級の調整定員ではない」「これからもとにかく現場の生の声を届けてください」などたくさんの声が届きました。また、管理職からも「ギリギリの状態で学校を回しているがもう限界だ。これ以上職員に無理は言えない」というメッセージも寄せられています。今後は、市町教委・県教委・文科省に、この問題の解決のためにそれぞれの立場でできることを喫緊の課題として、迅速に行うことを強く求めていきたいと思えます。調査結果・記者発表資料の詳細は以下の通りです。

1 未配置の状況

	小学校	中学校 (特支学校を含む)	合計
常勤	60人	42人	102人
非常勤	24人	42人	66人
合計	84人	84人	168人

2 未配置の理由

【常勤】

	産育休 代替	病気休暇 代替	介護休暇 代替	定員 未充足	その他	合計
小学校	10人	22人	0人	28人	0人	60人
中学校	3人	18人	1人	19人	1人	42人
合計	13人	40人	1人	47人	1人	102人

【非常勤】

	兵庫型	主幹マネ	初任研	特支加配	その他	合計
小学校	8人	1人	8人	6人	1人	24人
中学校	7人	9人	17人	5人	4人	42人
合計	15人	10人	25人	11人	5人	66人

3 未配置の自治体数

未配置の数	0人	1~3人	4人~9人	10人~
自治体の数	12市町	18市町	4市町	6市町

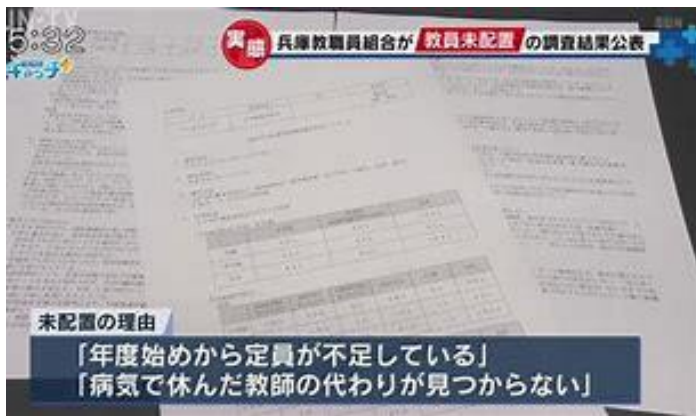


4 現場での様子や対応

- ・学級担任を未配置にするわけにいかないということで、高学年の専科教諭や兵庫型学習システム担当教諭が学級担任の枠に入る。本来は専科(図工や音楽)で「空き時間」だった担任が専科(図工や音楽)の授業をしている。
- ・未配置の期間が短期間の場合は、空き時間の教員が順にローテーションなどで入る。
- ・本来、加配でTT(チームティーチング)や少人数指導ができるはずのところ、その担当教諭が未配置の学級に入るために、加配としての活用ができない。
- ・この状態以外に、コロナ罹患や濃厚接触による出勤停止状態の職員が重なれば、そこの穴も埋めなければならない、さらにギリギリの状態になる。やむを得ず自習対応の場合もある。
- ・これらが慢性的な長時間労働を生み、また、病気休職に入る教員が出る。「ギリギリの状態でのいでのいる」(ある市町教委担当者)

5 教員不足の理由など

- ・そもそも学校の中に、臨時教職員が多い実態がある。
- ①若い教員が増え、産育休取得者が増えていること。
産休をこれから取ろうとする教員が「申し訳あり



ませんが、〇月〇日より産休に入らせていただきます」とあいさつをしなければならない状況。とりわけ代替者が決まっていないうちに産休に入る日を迎える教員の気持ちは…

- ②本調査でも明らかになったが、病気休職者が多い。働き方と密接な関係。それだけ学校現場が大変になっている。
- ③義務標準法により、児童生徒数の変化で学級数が決まるために、学級定員がギリギリの時は翌年度のことを考え、正規を入れず定員内臨時教員で対応している。
- ④児童数の減少を見込み、本来、正規の枠のところを臨時教員の枠にしたり、国の加配分を、非常勤に分配し配置したりしている。
- ・学校の長時間過密労働の実態等により、学校現場が魅力ある職場になっていない。若い人が敬遠。年配の経験者も「常勤」は希望しない傾向にある。
 - ①採用後、理想とかけ離れた勤務実態を理由にすぐに退職をする。
 - ②学級担任が病気休職でその代替が未配置のために入った教員も病気休職。やっと配置できた臨時教職員も続かず退職するといった例はまれではない。
 - ③教員採用試験倍率の変化（兵庫は5倍を維持しているが）教員志望者の減少傾向

6 未配置のためにおこる問題

- ・何より、その学校で学ぶ子どもたちの学習にとって大きな弊害になっている。本来いるべき先生がいないのだから、その弊害は一つの学級にとどまらず、それをカバーするために多くの学年の子どもたちの学習に影響している。
- ・その学校で働く教職員がみんなでカバーすることで、何とか未配置の状態をしのいでいるので、その分がすべて過重労働になっている。ますます、病気休職者や退職者が増える。臨時教職員もなり手が無い。配置できてもすぐに辞める。また、未配置になる。
- ・これらを含む、教職員の働き方のブラックな実態が、若い人たちにとっての教員志望離れにつながっている。

7 今後の組合としての取組等

とりくみの基本

- ・市町教育委員会、県教育委員会にはこの調査結果を重く受け止め、未配置の解消につながるあらゆる方策を検討することを要望。同時に市町教育委員会、

県教育委員会の対応では限界があることも事実。全国的な問題であることから文科省への働きかけ（教育予算増・定数改善・給特法の改正等）も引き続き要望していきたい。

県教委に求めること

- ・学校現場が魅力ある職場になるように、教職員の多忙化解消のためにあらゆる施策を講じること
 - ①少人数学級を国の施策を前倒しする形で進め、学級担任等の事務量を基本的に減らすこと
 - ②教諭が本来の業務でない仕事を分担していることの解消（給食会計業務・就学援助会計業務等）について、喫緊の課題としてその改善を行うこと
- ・臨時教職員がより働きやすい職場になるように
 - ①同一労働同一賃金の趣旨から、正規教職員と賃金権利が同等になるようにさらに処遇改善にとりくむこと
 - ②妊娠教員の負担軽減のための措置のうち、4月中に産休に入る小学校学級担任に始業日から補助教員を配置する制度（先読み加配）の対象教員と期間の拡大を行うこと

8 「#教師のバトン」は兵庫でも例外ではない

この働き方を変えていかなければこの問題は解決しない。

「出勤7時、退勤21時、基本的に休憩なし、小学校勤務、初任者でまだ4日目での状況です。もう限界です。助けてください。」

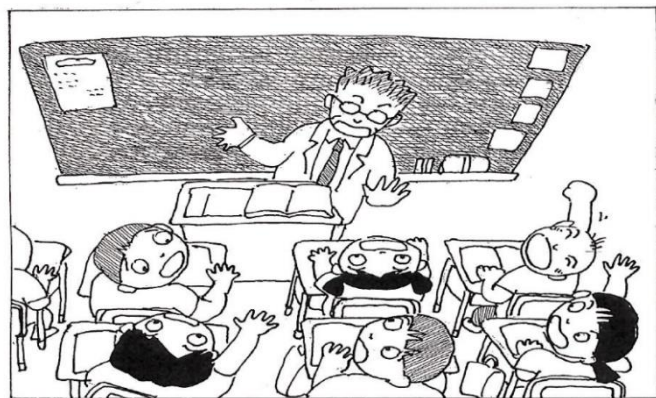
実際に今年4月7日に新任が退職した例がある。

「つらい、我が子とあつて話ができるのは1日に10分ぐらい。朝は我が子が寝るときに朝ごはんの用意だけして学校に出勤し、夜は我が子が寝る直前に帰る日々。こんなに愛しい我が子がいるのに何やってんだらう、私。この働き方では続けられない。」
同じような状況・理由で先輩教師が辞めたことを涙ながらに報告する組合員がいた。

9 最後に

今回の調査結果を、保護者、地域の方、教育委員会関係者、そして教職員など、教育に関わるより多くの人と共有すること、この課題の解決のためにそれぞれの立場で知恵を出し合い、一刻も早くこの状況を変えていくことが重要。

本来、配置されなければならない教員がいないまま学校が進んでいくという異常な事態の解消のために、そして、兵庫で学ぶ子どもたちとそこで働く教職員のために、教職員組合として頑張りたい。



教職員の未配置を解消し、生き生きと働ける職場を！！